

四国農学連報

第 21 号

発 行 者 校 長
 四 国 地 区 農 業 大 学 校 農 学 連 盟
 編 集 校 長
 香 川 県 立 農 業 大 学 校 農 学 部 農 業 自 治 学 生

これまでを振り返って

四国地区農業大学校学生連盟会長
 香川県立農業大学校学生自治会長

藤 村 優 一



私は幼い時から母に「これからは食の時代が来る。優一には農家か、政治家になってほしい。」とよく言われていました。幼い私は「政治家」はよくわかりませんが、「農家」は家に畑があることもあり、「政治家」より身近なものに感じていました。

母の「食の時代」という言葉は、常に私の意識の中にあつたように思いますが、高校受験の時には、よく報道される食べ物の安全性や生産から家庭の食卓までの過程などに様々な疑問を抱くようになりました。この疑問を解消し、知識をつけるために農業高校の食品加工科に入学しました。

高校で食品加工の勉強をしていくにつれ、使われている食材について関心を持つようになりました。特に野菜に興味があることを担任の先生に相談すると、香川県立農業大学校を勧めてください、野

菜園芸コースに入学しました。

農業大学校では、今まで勉強していた事とは違う知識や技術について授業や実習を通して教えていただきました。私の知識や経験が増えるにつれ、母の「食の時代」という言葉に、作物の栽培や流通には「食」への様々なニーズに応えるために考えられた取り組みがあり、農業という産業になっているという自分なりの考えを持って、さらに将来の目標を決めることができました。

私の目標は、農協の職員として農業を始める人達を助け、ゆくゆくは地域を支える担い手となるような農家を育てられる指導員になることです。

私がそう思うようになったのは、友人が卒業後農業を始めると聞き何か助けになりたいと思つたことと、農家実習でお世話になった農家さんが「いつか自分の栽培した野菜でスーパ―を埋め尽くしたい」という夢を持っている」という話をしていたことです。

勉強以外でも今までの学生生活で、知識や経験の他にも研修旅行、農学連スポーツ大会、農大ふれあい市などたくさんさんの思い出ができました。

農学連スポーツ大会では、主催校として運営がスムーズに行くように校内で自治会役員や各スポーツ部の部長達と何度も話し合いをして計画を立てました。当

日は、予定通りにならないこともありましたが、参加した各県農業大学校の先生方や学生の協力もあり大きな問題も無く終えることができました。



農大ふれあい市は、とても印象に残っています。平成二十六年の農大ふれあい市は私が自治会長として運営をし、様々な経験を積ませてもらいました。

私は高校時代まで人を引っ張っていったことが無く、前自治会長のように自分がやっていけるのかとても不安でした。実際やってみると思うようにできず、いろいろな人に迷惑をかけてしまいました。同級生や後輩達の協力のおかげで無事問題なくふれあい市を行うことができ、閉会宣言をする時はものすごい達成感を感じ、副会長とともに涙ぐむほど感動しました。

皆で協力することの大切さ、人を動

かすことの難しさを学べたと思います。これからの就職先でも今までの経験を生かしていきたいと思っています。

後輩達には、農学連スポーツ大会や農大ふれあい市をできれば新しいことを加えて、さらに良いものにして欲しいと思います。その時には、いろいろな人に迷惑をかけるかもしれないし、思うようにいかないこともあると思います。ですが、がむしやらにがんばってやると決めたことは最後までがんばって欲しいと思います。

農業大学校での二年間の生活はとて多くのことを学び、新しい目標をつくることもできました。残り少ない学生生活ですが、精一杯学び出し出を作つていきたいと思っています。



農家実習で思うこと

香川県立農業大学校

校長 西山芳邦



香川県立農業大学校では、一年次の十月〜十二月の毎週水曜日と木曜日、合計十五日間を農家実習に充てています。農業大学校での農業実習は年間を通じ学ぶところは多いと思いますが、農家実習は農家の方と作業をともにし、技術や考え方に触れるいい機会です。学校の授業時間に縛られず相手農家に合わせた実務の中で、プロの作業の速さや丁寧さ、日頃の観察力や工夫、経営に対する考え方など、自分の足りないところを知り、これからの目標とすべきところを感じることができたのではないかと期待しています。

しかし学生を見てみると、明確な就職意欲を持っている者から高校の延長でまだ自分の将来方向を見いだせていない者までさまざまのように見えま

す。そこで、本校の学生にはどういった点に留意すべきかということを考えている中で、三つの力が大切であると伝えられています。

これは、斎藤孝氏の著書「子供に伝えたい三つの力」(NHKブックス)に書かれているもので、キャリアデザインという私の授業の中で引用させてもらっています。その三つは、①「コメント力」、②「段取り力」、③「まねる盗む力」です。農業という場面で、体をつかい、作業をスムーズに効率的に進める上で、これらの力をもっと意識して取り組む必要があるように思っています。

三つの力を少し詳しく説明すると、「コメント力」は、説明や指示の内容から自分でポイントを整理し、簡潔にまとめ、答えることのできる要約力、それを踏まえ分からない点などを確認する質問力などとともに、ある事柄についての考えを的確にまとめ伝える能力だと思っています。

次の「段取り力」は、日頃の作業でよくいうところの段取りであり、日々の作業をスムーズに行うための場の準備、道具、作業の手順、時間配分などをあらかじめ予測しながら整えておくことです。また、周りの人の動きや作業の進み具合を見ながら次に自分がどう動けばいいかを考えておくことでもあります。

最後の「まねる盗む力」は、農作業の基本的な動作をまねることであり、作業の巧みさ、丁寧さ、スピードなどの違いを認め、相手の技を盗むことだと思います。

こうした力は、例えば作業の指示を受けた際には内容や疑問点を確認するコメント力が求められ、同時に段取り力を発揮しながら、作業の全体を考え、準備を行い、熟練者をまねながら作業し、終わればその日の内容や問題点を要約しておくというように関連し合っています。大事なことはこうした力をどうすれば鍛えられるかですが、「段取り力」や「まねる盗む力」は実践を通して、日々の至らなかつた点や技術の未熟さを認識することのくり返しが大切なように思います。このためには、メモをとることもや作業日誌をつけて振り返ることなどが大事だと思います。

農家実習は、学生のこうした力を向上させるいい機会であると同時に、農作物を作るだけでなく、売るための工夫としての多様な売り先と商品づくり、そして人脈づくりの大切さを学ぶ好機でもあります。

農業大学校卒業生は、その多くが地元での就職、あるいは農業法人や農業関連企業などへの就職など今後も地元に着した活動を行う者が多いと思います。人脈づくりの最初は、是非農業大学校生同士の連携をしっかりと保ちながら、多くのネットワークを築いて、お互いに向上し合ってほしいと願っています。また、できれば卒業後も農業大学校との関係もしっかりと保持していただければとも思います。常に知恵と工夫を忘れずに、あせらずに農業へトライして欲しいものです。

頑張れ農大生。

薬用植物に着目した

農業経営に向けて

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校

アグリビジネスコース 一年

浅井 悠 司



私が農業大学校に入学して一年が経とうとしています。入学した頃は農業に関して全くの素人で、はたしてこれからやっていけるのかと心配もしましたが、今では色々知識が付いてきたことで興味も湧いてくるようになりました。

さて、私が農業大学校に入学したのは卒業後の就職を希望してのことです。これまで全くの異業種で働いてきましたが、仕事をするうちに独立を希望するようになり、土地があるという地方の強みを活かした農業に目を付けました。

そんな私が目指すのは農業経営者としての成功です。

当初の私の農業に対するイメージはあまり儲からないというものでした。実際、業界の人口に対して産業規模は大きいとは言えず、一人当たりの収入は少ないようです。しかし、それは一事業体ごとの経営規模が小さく、効率的な営農ができていないことが原因にあると思います(いわゆる農家という事業体です)。そこでよく言われることですが、農業界としては今後経営規模を大きくし、法人として生産を行うことで産業全体の収益の向上が見込まれ

るでしょう。

とはいえ私個人としてはいきなり大きな規模の営農を始めることはできません。そこで小さい規模からの経営開始となりますが、その場合一般的な作物による農業経営では十分な利益を出すことはできないと考えました。

そこで私が目をつけたのは薬用植物です。薬用植物は漢方薬の原料で、日本でも昔から栽培されてきましたが、近年では中国産が安く流通しているため、国産の割合は一割強しかなく、ほとんどを輸入に頼っています。しかし、最近日本では漢方薬が見直され、国内の需要が年々高まってきていることや、中国の経済発展による原料価格の上昇などから、薬用植物の安定的な供給が望まれています。私はこういったことから産業にこそ利益を出すチャンスがあるのではないかと考えています。

現在は薬用植物を栽培している企業に研修に行かせていただきながら、薬用植物の流通、経営、栽培方法などを学んでいます。そのいずれもがまだ確立していない状態のため苦労は絶えませんが、未知の分野を開拓していくことに喜びを感じています。今後は農業大学の農家体験学習で、原料の自生産を行われている製薬メーカーにお世話になる予定で、メーカーサイドからみた薬用植物の需給状況などを学びたいと思っています。

さて私の農業経営へのビジョンは以上の通りですが、私自身行動することを感じたことがあります。それは人とのつながりの大切さです。薬用植物に着目した当初はインターネットを利用して情報収集をしていましたが、なかなか有用な情報を得ることができませ

んでした。しかし、農業大学校や支援センターの先生方、研修先の企業や製薬メーカーの方たちに相談すると色々な情報やアドバイスをいただくことができ、経営開始までに行うべきことが明らかになりました。今後は薬用植物に携わる方々と連携を取りつつ、今度私がみなさんの役に立てるようになりたいと思っています。

メロン農家で儲けたい

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
アグリビジネスコース 一年

向 椋 太 朗



私の家は鳴門海峡の小島にあり、農業と漁業で生計を立てています。両親、祖父母は、農業や漁業に誇りを

持っており、一年を通して一生懸命働いています。しかし近年の生産資材の高騰や農作物の市場価格低下の影響で、より品質の良い物を大量に生産しない限り、経営の向上は見込めません。また、祖父母も高齢で、病気が味とせん。また、ももあり、その対応として、機械導入による省力化や、アルバイトの雇用を行っているところですが、「一日も早く、私が後継者になること」が期待されています。私は、このような我が家の農業経営の在り方を見直し、「儲かる農業」へと改善するために、農業大学校に進学しました。

農業大学校に進学し、早や八ヶ月が過ぎましたが、そろそろ卒業研究の計

画をたてなければいけません。最初に、我が家の経営の中から改善できることを探しました。我が家の場合は砂地畑をばと大規模ではありません。その為、大量生産することは厳しいです。「畑を増やせば大量生産できるのではないか?」そう思いましたがそれでは人手が足りないことが起こります。雇用も考えましたが、そうなるコストがかかります。また、小さな島なので、畑を借りるほど土地が余っているわけでもありません。「そうなるか?」そう思いましたが、品質は今が最高品質であるため厳しいです。

「ではどうしたら儲かるのか?」私は六次産業化に注目しました。「我が家で栽培している作物を加工して販売する」ということです。これにより商品としての附加価値が付きます。例えば、鳴門金時、鳴門わかめ、鳴門ラッキョウは、私の地域の特産品として有名です。また、その加工品はお土産としても人気ですが、なぜか、地元のお土産物屋で売っている鳴門金時の加工品は、県外業者のものが大部分です。つまり、「鳴門金時の地元産の加工品が少ない」、ならば、「生産した農作物を加工品にすれば、従来までの農業経営より儲かる!」私はそう思います。私の地域では六次産業で成功された農家さんが少なからずいらっしゃいます。その人たちのように、「我が家の経営を六次産業化する!」このことを卒業研究の目標にしました。

私は八月から十一月まで、農業大学校の実習において、メロンの栽培管理に多くの時間を割いてきました。先生の指導の下、誘引、受粉作業の後、摘

芯、摘果作業に取り組み、一、五日前後の丸くて甘いメロンを生産することができました。徳島県立農業大学校では、様々な品種のメロンを栽培しながら、ハート型に成形することや、文字を彫ることに伴って附加価値をつけて販売する研究も行われています。一昨年にはメロンの赤肉種である「タカミレッド」を使って、品質と味の良いハート型メロンの成形に成功しました。これらの先行研究をヒントに、私自身もメロンの附加価値の向上に繋がる栽培方法を研究し、メロンを用いた六次産業化にも取り組みたいと思います。

メロン栽培において、いわゆる「摘果メロン」の問題は受粉成功時から収穫までついてきます。糖度アップのために摘果するわけですが、その数はかなりのものになります。しかし、主果実の負担にならない程度まで摘果メロンを育て、それを加工品として販売できれば、メロン農家の増収につながります。昨夏、試験的に摘果メロンを漬かけ物や炒め物にして試食してもらったところ、さわやかで食感も良く好評だったので、今後は摘果メロンの新たな活用方法についても研究していきたいと考えています。

私は、農業大学校卒業後、大学への編入を考えています。農業大学校で培った実践力をもって大学へと編入し、確かな理論を習得することが目的です。グローバルな視点から、農業経営について深く学び、地域の視点から農業の諸課題を解決できる人材になりたいと考えています。また、バイオテクノロジーを使った品種改良や先端技術を駆使した植物工場にも興味があります。幅広い知識と技術を身につけ、我

が家の経営に活かしたいと考えています。来年度は、メロンの研究に励み、将来は、「地元のリゾートホテルや土産物店で販売できる農産物や加工品を作っていきたい」、そして「農業で儲けたい」と決意しています。



私と徳島農大

「そらそうじゃ」

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
 アグリビジネスコース 二年
 徳島農大「そらそうじゃ」代表取締役社長

金 喜 勝 美



私は現在、模倣会社徳島農大「そらそうじゃ」の代表取締役社長として運営を行っている。辛

くしんどい時もあるが、楽しみながら様々な取り組みを行っている。しかし、最初からこうではなかった。

私は数年間、社会人として働いていた。ここ数年の農政の取り組みや両親が農業をしていた事もあり改めて興味を持った事がキッカケで農業大学校に入り基礎的な事を学ぼうと思った。

ただただ農作物を作り出荷をする。それが農業大学校に入るまでの農業のイメージであった。だから農業の基礎的な技術を習得し、農作物の収量をどんどん上げて農協なり市場なりに出荷して売り上げを上げる事しか考えていなかった。高く売れるための知識としては、付加価値で「無農薬」「有機栽培」等ぐらいしか知らなかった。そして、それが「農業」であり「農家」の姿だと思っていた。

しかし、農業大学校に入学し授業を受けていると今まで思っていたこと以上の事が「農業」にはあると感じた。もちろん、作る技術を向上していくことも大切だということ。しかし作って出荷するだけでは今後の「農業」は発展していかないということであった。

近年では「六次産業化」が叫ばれている。作るだけではダメ、作って加工して販売までしなきゃいけないという。正にそのとおりだと思う。しかしながら全てをすぐに実践するのは難しい、就農してからだとますます難しいと思っている。

徳島農大「そらそうじゃ」(以下「そらそうじゃ」)では六次産業化を正に実践していた。加工品の開発や定期的に市を開催しての販売、各種イベントへの出店等と様々な取り組みを行っている。「そらそうじゃ」の運営は学生が主導

で行っている。企画開発課や営業課等に細分化されており、学生それぞれが役割を持って活動している。六次産業化を実践しての勉強だけでなく農業経営に関する勉強も会社運営を通して勉強できるということ。

なので学生のうちから様々な事にチャレンジすることができ、将来に向けてい

るんな方向への道筋ができてくると思う。入学してからいろいろと「そらそうじゃ」を通してやる事ができた。例えば、地元企業とのコラボレーション。農業大学校で生産した野菜を使って共同で商品開発を行った。プレス発表やラジオ出演等でPRもさせてもらった。また、対面販売時にタブレットPCを活用した商品の説明やSNSを利用して「そらそうじゃ」のPRを世界に発信する等、時代に即した取り組みを行う事もできた。それらを通して農産物の消費者であるお客様の意見を聞く事により、生産や加工、販売をする際の参考とする事もできた。

「そらそうじゃ」では、代表取締役社長というなかなか体験できないことをさせてもらっている。経営方針等を決めたりと、就農後に法人化を目指す上でのいろいろなことを知ることができている。自分で考え自分で企画したりと学生発信でいろいろできる。もちろん簡単な事ではないし、思うようにはなかなか運営活動は出来ないが、今は一つ一つ楽しみながらやっている。

農業大学校の講義や実習で農業に関する様々な事を学び、「そらそうじゃ」の活動を通して経営や六次産業化等への取り組みを学ぶ。とても充実した学生生活を送ってきたと思う。徳島農大「そらそうじゃ」の存在は

私にとって学生生活の中で非常に大きなもので、たくさんの方のチャレンジや経験をすることができた。

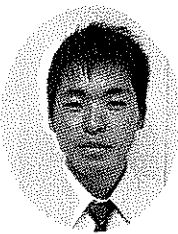


我が家の経営改善に向けて

「私のビジョン」

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
 生産技術コース 二年
 徳島農大学生自治会長

原 一 富 明



私は親がしている農業に関心がなく、幼いころより人を助ける仕事に就きたいと思っていました。それがより具体的に変わったのは中学生の時でした。担任の先生から自衛隊の高校があ

ると勧められ、神奈川県にある陸上自衛隊の学校に入校しました。自衛隊生活の三年間は自分を肉体的にも精神的にも大きく成長させてくれました。そんな中、夏や冬の休みに実家に帰省し家の仕事を手伝っているうちに農業の面白さと無限の可能性に心惹かれるようになり、自衛隊を卒業と同時に退職し徳島県立農業大学校に入校しました。

私が住んでいる徳島県の板野町は春ニンジンの生産が盛んです。我が家でも春ニンジン栽培を栽培し、JA出荷しています。しかし、他県との競合により価格が安定しません。市場でも品質や選別が悪いと受け入れられず、経営は厳しくなっています。しかし、これはニンジンに限ったことではありません。農業で儲けるためには、生産量や品質の向上はもちろんのこと、販売戦略の確立や販路の拡大が課題です。

そこで、我が家の経営改善に活かしたいと考え、授業の一環である農業体験学習での研修先に四国最大級の一万千㎡のハウスを持ち、葉菜類の水耕栽培で契約販売をしている会社を選びました。私は農業大学校で学ぶまで、物流や農業経営に関する知識が全くありませんでした。しかし、その会社での研修を通して販売戦略や契約実務など、農業経営の一端に触れることができました。実際に、ホテル、レストランや量販店などの厨房や事務所を見学できたり、リアルな商談に立ち会うことができ、とてもいい刺激になりました。

授業では、農業生産に関する知識や技術の習得に加え農業経営についても理論から実践までを学ぶことができました。一般社団法人アグリフューチャー・ジャパンとの提携により、定期的に特

別講義や先進企業・先進農家の代表者による、講演や実習も多く設定されています。県知事が農業大学校を訪れた際の座談会では、私もパネリストのひとりとして意見を述べ、直接アドバイザーをいただいたこともありました。

また、多くのセミナー等に参加し、色々な分野の人と意見交換をすることにより、農業を営む上での諸課題や消費者の動向、また経営や販売に関する戦略等、様々なことを学ぶことができました。農業に関することやそれ以外のことも色々な角度から物事を考えられるようになりました。そして、人との繋がりも広がり、今後の農業経営に向けて、一種の希望が見えてきたと感じています。

私は将来、親とは全く違う農業経営をしたいと思っています。しかし、新たな作物を栽培しても、適地適作という言葉があるように、風土や気象などの環境の影響で品質が悪くなったり、販売先も確立していないので安価で取引されることもあります。

そこで、私は新規作物を試験的に栽培しつつ新たな販路を開拓していきたくて考えています。スーパーマーケットやレストランと契約栽培ができるようになることがここ数年の目標です。これまで出逢ってきた農業青年や先進企業の方々の力やアドバイスをいただきながら、積極的に取り組んでいきたいと思えます。そして、特産物である春ニンジンの生産を継承しつつ、いち早く新規作物を栽培、販売して、年間を通して安定した収入が得られるような農業経営をしたいと思えます。

私はこの春に農業大学校を卒業します。就農後は家業を手伝いながら、よ

農業に改めて触れ合って

愛媛県立農業大学校

総合農学科一年 農産園芸コース

百合田 早貴



私の父と祖父は農業をしています。幼い頃から父の手伝いをして野菜や土と触れ合うことがありました。

そのため、野菜を作ることを大変さ、楽しさ、達成感を知ることができました。

中学三年生のとき、高校を選択するという時期に両親に、「地域は違うけど農業できる高校があるよ。」と言われてました。その時には父の後を継ぎたいと思っていたので強い意志で、両親の母校である宇和高校の生物工学科を選択しました。実習の専攻班は野菜だけではなく、ブドウや米の育て方から肥料まで幅広く学びました。高校三年間では学べなかったことや、農業に関し深い知識を身につけたいと思い、さらに詳しく学べる愛媛県立農業大学校を選びました。

実習の専攻班は野菜、花卉、果樹、

畜産の四つがあります。最初の時期は各専攻を体験するため野菜、花卉、果樹の三つをローテーションで回りました。

最初の仮の専攻班を決定する時には、家でしている野菜、米以外のことに挑戦しようと思い花卉を選択しました。花卉ではバラの水耕栽培、鉢物、露地栽培の新テッポウユリなどの管理、収穫、調製をしました。しかし十月に専攻班の確定をすると聞き、本当に自分がしたい分野は花卉であっているのかと改めて考え直した結果、やはり家でしている野菜、米が一番したい分野だ、と思い野菜班に異動することになりました。野菜班ではトマトの水耕栽培、イチゴの高設栽培、軟弱野菜の施設栽培など、たくさんの種類の野菜について学ぶことができます。しかし難点なのが、人数に対して野菜の圃場が狭い、一人当りの教えてもらえる時間が少ない、ということでした。そのため、自ら聞きにいかないと教えてもらえないことが多々あります。そのため、野菜班ではもともと積極的にならないかと思っていました。



イチゴ高設ハウスでの作業風景

私たち一年生は、一班が六月、二班が九月に、北海道士別市の酪農家や野菜農家のお宅にホームステイをしながら約二

週間、体験実習をします。私の場合、酪農家の波多野さんのお宅に女子二人でお世話になりました。そこでは乳牛が四十三頭飼育されており、すべての牛の管理をパパさんママさん、中国人女性の三人で管理をしています。パパさんは早朝の三時からお仕事を開始でとても早いです。早起きに慣れていなかった私たちが大変でした。生き物相手となると朝早く、何かトラブルがあるかもしれないので、常に近くにいないとダメ、と聞きました。

ある日の夕食中、私たち二人はパパさんとママさんに将来の夢のことなどを聞かれました。私は、「農業大学校を卒業後、五年以内に就農し、父の後を継ぎ、お弁当屋さんに出荷している米に加えて野菜も出荷したいと考えています。また、ネットで野菜などを販売することにも挑戦していきたいです。」と自分が考えている将来の夢を伝えました。それを聞いたパパさん達から、「今、早貴ちゃんは詳しい将来設計を考えているんだね。そこまで詳しく考えていたらお父さんたちも安心するね。家庭的にも経営者としてもお父さんたちを追い抜けるように頑張つてね。」という返事をもらいました。

農業大学校に入学してから、いろいろな人からのアドバイスを受けることが多くなりました。農業に関わりながら日々、自分なりに成長していると思えます。

農業大学校生活は初めて親元を離れての生活です。同級生との寮生活、一限九十分が四限の長い授業。自分たちで準備をする週一回の販売実習、農林水産研究所や果樹研究センターなど研究機関での実習が選択可能なこと、交

通手段が原付など、新鮮なことが多すぎて、あつという間に農業大学校生活の折り返し地点に来てしまいました。農業大学校生活は残り約一年なので、農業に関する深い知識を身につけ、クラスのメンバーと楽しみながら頑張っていきたいと思えます。

農大で学んだ事と

これからの目標

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年 果樹コース

佐伯 憲士郎



私の家は、専業農家で主に柿を栽培しています。住んでいる丹原地区は、甘柿や愛宕柿の有名な産地です。そんな私が農業大学校に入学した理由は二つあります。

一つ目は、農業高校出身だということです。一般科目は苦手でした。けれども、農業科目や実習は得意でいつも集中して取り組めます。また、高校のときは野菜班に入っており播種してから収穫するまでの大変さを勉強しました。この時、果樹や草花を栽培するのはと違って別の楽しみがあることに気がつくきました。なので、農業大学校に入学して自分の得意なことに取り組みたいと思います。

二つ目は、父親が農業大学校出身だということです。父親はずっと私に農業大学校はいい所で将来に生かすための勉強ができることを教えてくれました。いつしか私は「父親のようになりたい」と思うようになり入学を決めました。入学すると、寮生活になり家族の元を離れて生活することを不安に思っていました。同じ高校から来た友達や、新しく友達もできる不安は無くなりました。また、農業大学校の学生は県内各地から集まっております。貴重な話や体験を聞くことができました。このとき私は、改めてこの学校に来てよかったと思いました。

農業大学校に来てびっくりしたことは講義が九十分だったことです。高校のときは五十分だったため慣れるのにとっても時間がかかりました。最初の方は、全然集中できなかったけれどだんだんと講義を重なる中で慣れてきたような気がしました。

実習で、私は果樹コースを選びました。高校のときに学んだ野菜ではなく、将来を考えて柿栽培の技術をもっと身に付けたいと考えて果樹コースを選びました。

果樹コースの実習内容はみかんや柿の収穫、摘果、防除などです。入学時の実習は草刈りや草刈りでした。私は、草刈機を使うことが無く上手く刈ることができませんでした。先生に注意されながらもずっと続けていると次第に慣れ、今では草刈のプロになれたような気がしました。

また、摘果や収穫作業は家で手伝ったこともあり素早く作業できるようになりました。ちょっとした斜面の収穫や脚立に登っての作業は大変でしんどかったです。

防除作業は、一回もやったことが無く農薬の作り方も分からなかったのですが先生に農薬計算から教えてもらい、自分で計算してやると農薬を作れるようになりました。農業大学校では、家で

は体験できないようなことを経験することができ、果樹コースに入ってから良かったと思えました。私の将来の夢は、実習助手になることです。

これは高校のときから考えていたことで、私は人前に立つて話すことが好きで、生徒と一緒に実習ができるところがいいなと思い実習助手になりたいと決めました。実習助手になり、農業の楽しさや魅力を伝えていきたいと考えています。そのためにも、今までよりももっと勉強し専門知識を身に付けたいと思います。また、二年次には果樹研究センターで、柿だけでなく果樹全体を学びたいと思います。

実習助手だけでなく、家の農業を継ぐことも考え、あと残り少ない時間を有意義に使い夢の実現のため日々努力していきます。



桃の剪定作業

農大で見えてきたもの

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年 畜産コース

永 易 宏 明



「窒素、リン、カリのこの三つは植物に必要な三要素です。これはよく試験で問われるから覚えておきましょう。」

高校時代に習った知識は全部が全部試験に必要だからというもので、決して実用生活で使われることが無いものばかりだろうなというのが、僕が当時勉強しながら思っていたことでした。しかし、この愛媛県立農業大学校に入学したおかげで無駄なことというものは無く、どのようなことだとして活かすことができることを学びました。窒素は葉に必要な成分、リンは花に必要な成分、カリは根に必要な成分。

こういったことは高校時代の自分にとって別に使われることのないどうでもよい知識だったのですが、この農業大学校で改めて学んだ時にあの高校で習った知識というのはいきなりどこかで活かせられる生きた知識となることを痛感しました。

僕が今、専攻している畜産の分野でもそのことは言えます。高校時代に生物の授業で勉強した遺伝について、「そんなこと知らなくて困らないだろう」と当時は思っていました。畜産の分野でいえば品種改良の面において重要なことです。

もし、遺伝のことが分かっていたいなければ、生産性の高い品種の繁殖や、ブランドとなる品種は開発されていなかっただと思うのでメンデルの法則の発見というのは現代社会に必要不可欠な常識であることが実感できます。

僕は、畜産コースで動物と直接対応するのではなく、動物に与える飼料に関する勉強を主にしています。それを専攻した理由は自分の高校時代に学んだ知識と重なるところがあつたからです。例えば、粗飼料であるサイレージは乳酸による発酵作用によってPHを四・二以下まで下げると酪酸菌等のカビの繁殖を抑えることができます。このことを知った時に、「牛はPH四・二以下のような酸っぱいものを夢中で食べるのか!」と、驚愕しました。このことが飼料に関することをもつと知りたと思うきっかけになりました。



現地実習で仲間と

知識の面だけでなく、生活の面でも得られたことはあります。愛媛県立農業大学校は一年生の間は全員が寮生活

になります。そのため自分だけが良いという生活では他の人から苦情を言われたりします。入って来た当初は友達と話している声が大きすぎて注意されたりしました。また、これとは逆に近くの部屋の人の音がうるさすぎて眠れない夜もありました。こういった経験は寮での集団生活でないと身につけることができないので、ここでの経験は必ず社会人として生活していく上で必要不可欠なものになると思います。

もちろんまだまだ僕は未熟者で農業のイロハなんてものは分かっていることばかりで失敗続きですが、農業大学校でのこの学びが将来のどこかで何かの形で活かせられると思うので、ここでの生活をもつと豊かなものにしていきたいです。

残り一年程となりましたが一分一秒実習においても、講義においても、生活の面においても、愛媛県立農業大学校でしか学べない貴重な学びの時間として大切にしていきたいです。

愛媛農大自治会を

より良いものに

愛媛県立農業大学校
総合農学科二年 果樹コース
愛媛県立農業大学校学生自治会長

木 村 将 磨



今年度の四月より、私は愛媛県立農業大学校の自治会長に就任しました。自分自身、学生を

リードしていくことは初めての経験であり、まだ会長となつて間もない頃は、先生方にご指導いただいたことを今でも覚えていきます。

自治会が主体となる活動のうち、力を入れている活動は大きく三つあります。一つ目は一泊二日のオープンスクールです。今年も沢山の高校からの参加があり、食事会や意見交換などで大いに盛り上がりました。また、私たちが普段生活をしている学生寮に一晚泊まってもらい、実際にどのような環境で過ごしているかを体験してもらっています。

二つ目は、農学連スポーツ大会です。愛媛県立農業大学校は毎年、それぞれの部で優秀な成績を収めており、今年も野球、バレーボール、バドミントンが優勝し、唯一優勝できなかった卓球も準優勝しています。これは、我が校が自信の持てる大きな魅力の一つです。

三つ目は、農業大学校のイベントの目玉とも言える収穫祭で、今年も来場者数と売上げが前年度を大きく上回りました。また、愛媛県立農業大学校のアイドルであるヤギを登場させたり、小学生までを対象とした「ちびっこスタンプラリー」を開催したりと、子どもたちも楽しめるコーナーも設けました。大人から子どもまで幅広い年齢層に楽しんでもらい、私たちの活動を地域の方に知ってもらえればと思っています。

私は、昨年の九月に徳島県で行われた農業経営力セミナーに参加しました。四国の農業大学校の数名が集まり、グループワークや意見交換等を行いました。他校の農業大学校生との交流はおおいに刺



農業経営セミナーでの意見交換

激を受けるものであり、学生同士で意見交換をする機会がもっと増えてほしいと強く思いました。

このセミナー後、自治会長として、これからの自治会の活動をどう運営すべきか、自分なりにその考えをまとめたと思います。そこで私は、プロジェクト活動を「全国農業大学の自治会活動の現状分析」をテーマとし、全国の農業大学校四十二校の自治会長にアンケート調査を依頼しました。内容は、自分が知りたかった他校の自治会活動の内容や食事のこと、他校との交流状況と大きく三つの内容としました。

このアンケート調査は全国でも初めての取り組みであり、回答率は九割と貴重な意見をたくさんいただくことができました。特に、私自身も他校

との交流を増やしたいと考えていましたが、全国農業大学の半分の自治会長も私と同じ意見であることがわかり、心強く思うとともに従来のイベント活動だけでなく、幅を広げることでより活発な活動になると感じました。

今年度を振り返ってみると、月日の流れをとっても早く感じることも、毎日が忙しく充実した日々を送ることができました。次代の自治会長には、これまでの会長達の思いを受け継いで頑張りたいと思っています。

最後になりますが、これからも全国の農業大学校並びに愛媛県立農業大学の発展を強く願っています。

私の将来の夢

高知県立農業大学校

園芸学科一年 野菜専攻

谷 勇 大



私の家は高知県土佐市でキュウリを作っています。小さいころから父や曾祖父、母は農協の職員ですが休日はその母も含めて家族でキュウリの収穫やハウスの張り替えなどの農作業をするのを見てきました。

私は中学生くらいからキュウリの摘葉やハウスの張り替えなどの作業を手伝うようになり田んぼを耕す為にトラクターに乗らせてもらったりもしました。

農業大学校に入って知ったことですが、父はキュウリの栽培が上手で、地域の人は十aあたり十八tのキュウリ

を収穫するのが目標であるところ、毎年二十三日以上と、かなりの収量を見ています。そんな農家の父を見ていると自分が工夫したことや至らなかつたことがそのまま形になって現れる農業という仕事の、まるで職人のように腕を磨いて良いものを作り経営していくという所に魅力とやりがいを感じ、跡を継ぎたいと思うようになっていました。

私はいろいろある作物の中でも、キュウリは回転が速く自分の世話がすぐに形になって現れるので、やはり一番面白いと思っています。高校を卒業する時には、そのまま就職するのも良いと思っていました。しかし、私はキュウリを作りたいという思いは強く持っていました。いざ作ろうと考えると、どんな品種があり、どんな栽培方法があるか、など細かい所をもっと知りたいたいと思うようになりました。なので、将来自分がどんな農業をしていくかの指針を確かなものにするために農業大学校を受験しここにいます。

農業大学校に入る前は相部屋で寮生活というところで少しは不安もありましたが、周りの人達もフレンドリーで自由な時間も多くあるので、最近は慣れ楽しく過ごせています。自由な時間には趣味である読書やゲームをして楽しんでいきます。

私たちの学校では一年時に一人ひとりが作物を選び、またそれをプロジェクト課題としています。私は将来キュウリを作ると決めているのでキュウリを取り組んでいます。苗作りから畝立て、定植、誘引とすべて自分でやってみると定植した後には苗が倒れないように支えたり、誘引のヒモ取り付け、脇

芽とりや摘葉といった細かい作業に慌て、手が回らない時もあります。また、朝、葉についた露の量や葉の形や色などからどれぐらいの水がいるか、肥料は不足してないかを読み取らなければいけません。父が何でもないので、自分で実はいろいろなコツや毎日の積み重ねが必要であるということ自分でキュウリを作ること初めて気が付くことができました。

課題としては、家でも作っている「グランツ」という品種と、父が作るか検討していた「デイソール」という品種をやっています。「グランツ」は収量の波が少なく安定的で多収量が期待でき、高温下での品質低下が少ないという品種です。「デイソール」は果実肥大が早く、初期から多収量になり低温下にも強い品種とされています。安定的な収量の「グランツ」か、初期から収量が多い「デイソール」か、どちらが自分にあっているかを知るためにこの二種類を栽培しています。

また、定植した後の水のやり方や、一日に吸う水の量など疑問に思ったことをデータ取りしながら取り組んでいます。家のキュウリは農業大学の三日遅れで定植しました。葉の大きさと厚さ、木の生育の仕方、花と実のつき方などを自分が栽培しているキュウリと見比べてみると、今までなんとなく見ていた父のキュウリの樹がとてつと寧に世話をされているということに気が付きました。そして父がどれだけ真剣にキュウリ作りと向き合っているかを知ることができました。そんな父にできるだけ早く追いつくために、今注意しておかなければならない所や必要な作業を親に聞いたりして、自分が管

理するキユウリの栽培に活かそうと考
えています。
私は卒業後、すぐに就農を予定して
います。しばらくは父との共同経営で、
手伝いながら父が積み上げてきた技術
を自分の物にして腕を磨いていくつも
りです。まずは授業についてもっとし
っかり勉強して基礎知識も身に着け、
早く親を上回り、キユウリで二十五
をとりたいたいと思っています。

農大に入って

高知県立農業大学校

畜産学科一年

磯崎 智世



私の家は、高知県の特産畜産物である和牛の土佐褐毛和種の繁殖肥育の一貫経営をしています。このため、

幼い頃から牛に触れる機会は多くあり
ました。父が仕事をしているのを見
たり手伝ったりするのはとても楽し
かったです。手伝いといっても、排泄物を
片付ける「ポロ出し」という作業や子
牛のミルクやりなど簡単なことだけ
であり、父に言われたことをただこな
していただけなので、その作業をする理
由や意味なども一切考えずに殆ど遊び
感覚で手伝っていた記憶があります。
それでも、手伝いに行くとき父は褒めて
くれたのでそれがとても嬉しかったし、
自分が少しでも関わった牛が元気に育
っていくのを見てなんともいえない喜
びを感じていました。高校生になり自

分の一生を決めることになる進路選択
の場で「やりたいこと」を考えたと
ふと頭に浮かんできたのはそんな家
畜舎での思い出でした。このとき私は
畜産をやるかと決意しました。昔から
父の仕事が一番近くで見て、その仕事
をやる苦しさとその先にある大きな楽
しさや喜びを少しでも体験して知っ
たからこそ将来もこの牛達に関わる
仕事がしたいと思ったのです。

農業大学校卒業後は一度地元近辺で
農業系の会社に就職し、仕事をしなが
ら父の畜産業を手伝おうと考えていま
す。狭い視野を持つ畜産だけの世界
を見て農業をするよりも、好奇心を持
って多くの物事に関わり世間を知るこ
とで、考え方に柔軟性が増し自分の畜
産経営をより良い方向へ向かわせる為
の選択肢が増えると思ったからです。
見分を広め多くの経験や知識を増やし
たあかつきには、我が家の畜産をしっ
かりと支えていけるような人間にな
りたいです。家の牛にはずっと一生関
わっていかうと考えています。でもその
ためには、経験も知識も私には少しし
かありません。自分の家のことしか知
らないからです。そのため、多くの実
習経験と知識を得ることのできる農業
大学校に入校することを決めました。

農業大学校に入ってから本当に自
分がいかに何も知らなかったかと思
知らされることとなりました。適当な
時間に牛小屋に行き、漠然と何も考
えず父に言われたことこなすだけか
ってこなかった今まではわけが違
いました。一頭一頭に違う餌のやり方、
成長具合の測定、妊娠状態等牛の状態
によっての牛舎の移動など想像以上に
やらなければならぬことが多く、そ

れらひとつひとつにも理由があるので
それも考えながら作業しなければなり
ませんでした。最初の方の実習や授業
についていくのに私は必死でした。正
直、入校前はここまで自分が何もでき
ないとは思っていませんでした。牛に
は昔から関わっているしなんとかなる
だろう。どこかでそんな油断をしてい
たのだと思います。実際は体力不足で
寮に帰ったらすぐ昼寝、飛び交う専門
用語をなんとか覚えながら初めてばか
り大きな目標を掲げていきましたが、
このときは明日も一日乗り切れるだろ
うかという目先の不安ばかりが頭を埋
め尽くしてしまいました。けれど日が過ぎ
ればそれなりに体力も付き、知識や経
験も少しずつ増えてゆきました。何よ
りも一緒に入校した畜産科の二人のア
ドバイスや励まし、先輩のお話を聞か
せてもらえたり、園芸課にも友人がで
きたこと。同じ農業大学の学生とい
う立場で競い合い、そして助け合える
仲間に出会えたことが大きな支えとな
りました。家族や先生方、実習でお
世話になっている職員さんなど、見え
ないところで支えて下さった方々にも、
成長するという形でお返しができるよ
う頑張ります。

実習では、ホルスタインなど今までは実
際に見たことのない牛にも関わるこ
とができ、以前までは何も考えず漠然と
こなすだけだった作業の意味を理解して
やれるようになりました。また、牛のち
よつとした体調変化などにも目を向けら
れるようになりました。



畜産科実習にて

農業大学校に入校してからまだ少し
かたついでないと思っていました。気
付けばもう後輩たちの推薦入試が終わ
っていました。時間が過ぎるのが本当に早
かったです。それと同時に一年でやら
なければならぬことが沢山あるというこ
とも実感しました。農業大学校でどれぐ
らいのことを吸収できるかというのは、
自分の頑張りにかかっていると思いま
す。どうやって牛を健康に、そして安全
に育てればいいのか。実習内容や実家の
牛の状態、それを考えて自分が今取り組
むべき課題が明確に見え始めた気がしま
す。最初はどうしていいのに必死だった実
習も、最近では牛を少し観察して体調を
見るなどの余裕もできてきました。まだ
知らないこともできないことも多いけれ
ど、自分が確実に成長していることも実
感できています。将来、しっかりと畜産
をするために残りの一年と少し、しっ
かりと頑張っていきたいです。

農大に入って

高知県立農業大学校
畜産学科一年

大久保 凌兵



私の生まれ育ったところは土佐嶺北地域で、私の家は土佐赤牛の繁殖・肥育の一貫経営と土佐ジロー卵の生産、および水稲栽培を行っています。

嶺北地域は四国中央部の吉野川源流地域にあり、高知平野から望む分水嶺の北に位置し、四国の水瓶「早明浦ダム」があります。地域の北側には四国山地の峰々が連なり、吉野川の流れが北東に溪谷をなし徳島県側に開いているのみで、周囲を山々に囲まれた特異な地形にあります。この地域の面積は九百六十五㎓と、高知県の十三・六%を占め、標高は二百~千八百mの山岳地形です。土地利用状況は、その大半が森林で農用地面積は一・四%という典型的な山村地域となっています。

嶺北地域の畜産は、酪農、土佐赤牛、大川黒牛の肉用牛生産、土佐ジロー、土佐はちきん地鶏による卵肉の生産がおこなわれています。中でも土佐赤牛は高知県の一大産地となっています。しかし生産者は高齢者が多く、若い生産者はほとんどいないという課題があります。

課題がある一方で、嶺北地域には結束力もあります。先日は高知県の枝肉

共励会に参加しました。今回共励会の土佐赤牛部門の最優秀は高知県立農業大学校の卒業生が生産した枝肉で、過去最高の金額二百三十万円となっていました。この結果は枝肉の質が良かったのももちろんのことですが、枝肉の金額が通常よりかなり高額になっても生産者の地元嶺北のスーパーがセリ落とすなど地域ぐるみで生産者を支えていることがわかりました。

我が家の畜産経営は土佐赤牛の繁殖雌牛八頭、牛肉生産のための肥育牛二百羽です。これらの飼育のほとんどを祖父が行っています。祖父のモットーは「地元の方においしいお肉を食べてもらいたいので日々手を抜かず世話をする」というもので、とりわけ祖父は肥育には力を入れています。そんな祖父を尊敬しています。

私は小さいころから、祖父のそばで餌を食べさせたり、牛を追ったりしてきたので家畜に馴染みがありました。最近祖父も年齢のせいもあってか作業も一人でやっていくのはしんどくなってきたので、そのような姿を見ていたので私は高校卒業後すぐに実家を継ごうと思う様になりました。この考えを高校二年生の頃、祖父に伝えたところ「一回学校で牛について勉強してください」という意外な答えが返ってきました。考えてみれば確かに畜産は動物相手の仕事なので専門知識も知らない状態するのは危険です。祖父の足を引っ張ることになりかねないとも思い進学を決意しました。

たくさんさんの畜産関連の学校があるなかでも高知県立農業大学校の畜産学科

を選んだのは、実家で飼育している品種と同じ土佐赤牛を扱っていること、更には実践的な授業が大半であることで、卒業後すぐに就農できるような授業になっているということなど、当時の私が求めていたそのままの学校だったと思ったので入学を決意しました。

入学前には、就農したら土佐赤牛の熟成による有利販売ができないだろうかと考えていました。しかし実際に学校に入ってみて実習をする度、畜産物加工とは別の、畜産経営の難しさ、生産技術の奥深さを知ることが出来ました。中でも年一産を安定的に行い続ける繁殖技術に興味を持ちました。

実習では牛への給餌、給水、牛床の清掃の一般管理作業を始め、子牛への人口哺乳、ホイローターなどの機械操作、繁殖母牛の発情発見や健康チェックなどを行っています。

プロジェクトでは繁殖母牛の年一産を目指した飼養管理方法を課題に繁殖母牛の直腸検査、万歩計による歩行数調査、子牛の飼料摂取量などを調査しています。

また、来春三月に予定している職業体験や二年次に行われる農家留学研修では、牛肉の加工技術や地元とは違う生産者のもとで、家や嶺北地域と違った飼養管理技術や発想を学び、つながりを大切にしながら技術の向上と経営の安定につなげていきたいと考えています。

あと一年余り、卒業後高知県の畜産を担っていきけるような畜産経営者になれる様頑張っていきたいです。

二年を振り返って

高知県立農業大学校
園芸学科二年 花き専攻

伊藤 真敏



農業大学校に入って早や二年が経ちました。農業大学校では実習や講義などの授業を通して、農業の難しさ、作物を育てる大変さを学ぶことができました。

特に「農業は難しい」と実感したのは、実際に農家で研修した一ヶ月半の農家留学研修でした。農業大学校でも作物を栽培する上での温度や水分などの管理には気を付けて栽培するのですが、農家の方たちは農業大学校でやる以上に徹底した管理でした。自分たちのやり方はまだまだ勉強不足だと感じる一方で、農家の方の作業の一つ一つや、農業を経営していくうえで注意していることなど新たに知る事ばかりで勉強になることが多かったです。特に勉強になったと感じたのは、研修先で栽培しているユリの摘蕾作業でした。ユリの花蕾数は、五輪から六輪が適正とされており、それよりも多い輪数となると品質が劣り、販売単価も安くなります。このため、多輪の株は摘蕾をして五・六輪に揃えるようにしています。農業大学校では、摘蕾する時はあまり見栄えのことは考えていなくて、第一花を中心に蕾を飛ばしていたのですが、農家では、開花時のフォーメーションを考え、見栄えの良さを意識していま

した。ただ生産するのではなく、消費者のことを考え、いかにすればより品質を高めることができるかを考えて生産することが大切であると教えられました。

農業のことはまだまだ分からないことが多いのですが、この研修や学校での授業を通して、作物を栽培するということが分かった。作物を栽培していると必ず病気や害虫が発生します。天候などの影響も受けます。そのようなことを考慮して栽培しなければならぬので本当に農業は難しいと思いました。

私は農業関係の仕事に就職が決まりました。これから先もまだまだ分からないことが出てくると思いますが、現場の農家と連携しながら問題解決していきたいと思っています。

学校生活を通して

見えてきた事

高知県立農業大学校

園芸学科二年 野菜専攻

高知県立農業大学校学生自治会長

小松 大悟



私の家は、ハウススイカを栽培しておりスイカの栽培方法を勉強したいと思っていますが、

実際にはスイカを栽培するのは難しいという事でプロジェクトではナスを栽培する事にな

りました。学校でナス栽培を一通りやってみて、他の野菜も育ててみたいくなり先進農家留学研修では、フルーツマトを栽培している農家でお世話になりました。私はフルーツマトは栽培をした事がなく分からない事だらけでした。しかし、農家さんはフルーツマトについて優しく丁寧に教えてくれました。研修期間は一ヶ月半で、始める前は「とても長いな」と思っていたのですが、一生懸命作業をしている内に時間はあっという間に過ぎていきました。研修中にたくさんのお話を聞いていただく中で「私も栽培してみたい」という思いが芽生えたので両親に相談すると一つハウスを任せられる事になりました。農家さんからもさらにトマト栽培について教えていただける事になりました。卒業後はスイカ栽培を続けている両親の事も尊敬しているのです。スイカ栽培の勉強も続けていきたいです。また、トマトも続けて栽培し、自信が持てるようになりたいです。

私は、自治会長を経験する中で、よさこい鳴子踊りや農大祭などの行事を通じてたくさんのお話を学びました。よさこい鳴子踊りでは、皆をなかなかまとめきれず前に進めない事が多かったです。私は、「このままでは駄目だ。どうすれば皆をまとめられるのだろう」と悩んでいました。なかなか考えが浮かばず嫌になった時もありました。そんな時に助けてくれたのが仲間でした。仲間と力を合わせ達成することの大切さと喜び、人をまとめる大変さを感じる事ができました。残念ながらもよさこい鳴子踊りに出場する事はできま

せんでしたが地域の方々との交流や、皆の協力があったおかげで自治会長をやり遂げる事ができました。卒業後は実家を継ぎますが、農業も一人ではできません。人を助け、助けられる中で、人との連携を大事にして自分の将来に活かしていきたいと思っています。

農大に入学して

香川県立農業大学校

野菜園芸コース 一年

井川 奈月



私が香川県立農業大学校の野菜園芸コースに入学してからもうすぐ一年が経とうとしています。私は、普通

科の高校に通っていました。進路に迷っている時、家がタマネギ農家で小さいころから手伝いをしていた農業に興味を持っていたので、農業について学びたいと思って相談したところ、先生に勧められたのがこの農業大学校でした。オープンキャンパスに参加して、実践的で且つ楽しそうで、先輩方が生き生きと作業している姿を見て、入学を決定しました。

入学当初は、普通科高校出身で農業については手伝いをしていた程度なので、基礎知識も全くなく、不安でいっぱいでした。さらに入学早々コース委員に任命されてしまったので、ちゃんとやっていけるか不安で押しつぶされそうでした。

勉強面では、野菜についてだけでなく、いろいろな専門科目の講義がありました。土壌肥料や植物防疫、農畜産業概論や園芸作物概論、農業経営、農業簿記など、農業を経営していくために必要な知識を学ぶことができました。どの講義も初めて聞く言葉が次々と出てきて戸惑いましたが、最初は専門用語の説明など丁寧にしてもらえ、同級生に教えてもらったり等して行くことができました。また、学校の先生以外からも先進農家の方を講師に招いて、貴重な体験談を聞ける実践講話等もあります。このような様々な講義を受けることができるので、しっかりと身に付けていきたいです。

農場実習では、始めは用具の名前や使い方を覚えたりして進んでいきました。畝立ての時に歩行型の畝立て成形機を使ったのが初めての農業機械の操作で、とても緊張して操作しました。これまでに何度か挑戦しましたが、なかなか真つ直ぐ進むことができません。ガタガタの畝になってしまい、修正するのに皆に苦労をかけてしまうことも多々ありました。しかし今では、実習中指示されても大体の事はできるようになってきたり、機械での作業も少しずつ上達してきていると日々実感しています。

十月からは合計十五日間の農家実習が始まり、私はイチゴを栽培している農家さんにお世話になりました。ここでは、イチゴの管理から収穫、出荷まで一連の作業を体験させていただきました。作業の効率を良くするための創意工夫、イチゴを栽培する上で必要な知識、経営について様々な事を学べ、非常に良い経験となりました。

部活動では、卓球部に入学しました。



入部した理由は、ただ葉そうだなと思っただけでした。私は、卓球は全くの未経験者でラケットの持ち方さえ分かりませんでした。そんな私にも、先生や先輩、友人達が優しく指導してくれたおかげで、今ではラリーができるようになりました。しかし、農学連スポーツ大会では全敗に終わり、自分の未熟さを痛感しました。これからは練習に励み日々精進していきたいです。

十一月の終わり頃からタマネギの定植を始めました。家でもタマネギの栽培をしているのでとても興味がある授業でした。家では機械で定植しているので、また家とは違った経験ができました。これから成長していく過程をしっかり学んで、学校で身につけたことを家でも活かしていけたらいいなと思っています。

初めは不安でいっぱいだった学校生活ですが、今ではたくさんの方々に恵まれ、農業について学べ、充実した毎

農大での一年間

香川県立農業大学校
花き園芸コース 一年

松村 莉杏



私が農業大学校に入學して、早や一年が経とうとしています。私が農業大学校に入ったき

日が送れています。残りの一年は、一年目で取得できなかった資格試験等に積極的にチャレンジしていき、一つでも多くの知識や技能を身につけていきたいと思っています。

っかけは、高校時代に草花の科目があったからです。私は中学の頃から花が大好きでした。高校は農業科のある高校に入學し、二年間花について専門的に学びました。私は将来、草花が園芸関係の仕事に就きたいと思っていました。そのため、もっと知識や技術を身に付けたいと思い農業大学校に入學しようと決めました。私の専攻している花きコースでは、個性豊かなメンバード勉強をしています。実習では、キクやカーネーションの切り花類、ポインセチアやサイネリア等の鉢ものの類、パンジーやビオラ等の苗の類の栽培方法を学んでいます。鉢上げや枯れ花取り等の作業は高校時代の実習で何度も経験しているの問題無くできるのですが、出荷準備等の仕事はしたことが全く無かったの

何本の束にするか。どういった組み方にするか等々案外難しく慣れるのに結構時間がかかりました。でも、困った時には先生や先輩方が優しく教えて下さるので本当に助かりました。また、夏の暑い日のハウス内での実習は死ぬかと思うくらいかなり大変な思いをしました。何とか倒れずに作業をこなすことができたので良かったと思っています。

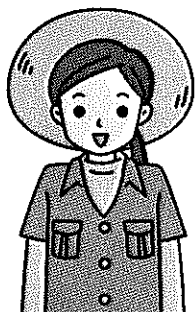


実習の他に、農学連スポーツ大会や農大ふれあい市などの行事があります。農学連スポーツ大会では、パドミントンの試合に出場しました。パドミントンは農業大学校に入って初めて部活動としてやったので、正直不安で一杯でした。その不安も、放課後の練習のおかげでだんだんと消えていきました。試合の結果は惜敗しましたが、とても良い思い出がまた一つ増えました。

農大ふれあい市では、花の販売を担当しました。花の販売は高校時代に経験があり慣れていたので楽しく行うことができました。ただ、やっぱり買いに来る人達の姿に未だに驚いています。あっという間に殆どの花が売れて行ったのが驚きでした。パザーで売ったパウンドケーキもわずかな時間で完売したことを聞き、「人気のあるものって本当に凄い」と感じた一日でした。

十月から十二月の三ヶ月間の農家実習では、私は洋ランを生産している農家に実習に行きました。同じ鉢物でも、ポインセチア等よりも栽培方法が難しいため、作業内容も大変な事ばかりでした。高校時代にも農家実習というものが有り、同じ農家で同じ作業をした経験があります。一度覚えていた事も時が経つと忘れてしまっていたので正直大変でした。多少の失敗はあったものの、時には優しく、時には厳しく指導していただいたので、とてもやりがいを感じられ、充実した十五日間となりました。

この一年間は私にとってとても充実したものとなりました。新しい友達がたくさんできて毎日が楽しいです。一年生もあと少しで終わってしましますが、二年生になっても今まで以上に勉強、実習、部活動に励み、悔いの残らないように過ごしていきたいと思っています。



農業の厳しさや

喜びを感じながら

香川県立農業大学校

果樹園芸コース 一年

織田 佑貴也



私が香川県立農業大学の果樹園芸コースに入学してから、もうすぐ一年が経とうとしています。

私が農業大学校に入学しようと思つたきっかけは、小さい頃から祖父の手伝いで果樹の収穫などをしていっているうちに祖父の大切に管理してきた果樹園を自分が後を継いで管理したいと思ひ、そのために果樹についてもっと深く学びたいと思ひ農業大学校へ入学することを決意しました。

入学した当初は、新しく学習する内容への期待がふくらむ一方で、新しい環境でうまくやっていけるだろうかと不安な気持ちもありました。授業は初めて習う科目も多く、理解してゆくのが大変でした。実習は、基本的な作業もありましたが応用の作業等が多く、よく自分の中でどうしたらいいのかと悩みました。そんな時には、先生方や先輩方から優しく教えてもらい、少しずつ分かるようになってきました。

農業大学校では、様々な資格なども取得することができます。私は、高校の時に農業技術検定三級を取得することができましたが、二級はまだ取得で



きていませんでした。農業大学校でも農業技術検定の試験を受けることができると思います。二級を取得できるように、試験の日まで勉強しました。試験当日は、時間いっぱい使って試験を受けましたが、惜しくも不合格となっていました。次の試験ではもっと勉強して、絶対に二級を取得できるように頑張りたいと思っています。

また、十一月には農大ふれあい市が行われ、自分達が栽培した果物やうどん、団子などの加工品を販売しました。私は、果物や加工品をたくさんのお客様が喜んで買ってくださる姿を見て、自分も将来、最初から栽培した果物でお客様に喜んでもらえるようにしたいと強く思いました。

十月から十二月にかけて十五日間という短い期間でしたが農家実習で実際

に農家さんの家に行き、様々な作業を体験しました。そこでは、栽培することの厳しさや一つ一つの作業の意味を学ぶことができました。

農業大学校での学生生活もあと一年となりました。これまでの一年間は初めてのことばかりで不安なこともたくさんありましたが、とても良い経験ができたと思います。二年生になると、勉強と実習で今よりも大変になります。残された時間を大切にしてこれからも多くの知識や技術を身につけてゆきたいと思っています。

農大の実習での

作業を通じて

香川県立農業大学校

造園緑化コース 一年

大野 寛史



私が農業大学校に入学しようと思つたのは、農業高校で造園を学び造園の魅力に惹かれたことから、もっと造園の知識や技術を学びたいと思ったからです。

入学してからのいろいろと実習してきましたが、一番良かったのはやはり剪定です。造園の仕事といえば剪定だと思つていたので、しかし、これまでの剪定実習の内容は、剪定鋏や植木鉢を用いた剪定でした、半年経つた今ではこれまでの剪定方法以外の刈り込

みや大きな木の透かし剪定にも挑戦したいと思うようになりました。

これまで行つた実習は、松の剪定やみどり摘み、グラウンドの草刈、芝刈り、落ち葉集め、カイズカイブキの刈り込み、芝の定植、校内の落ち葉集めなどの清掃、造園技能士三級の庭園作成と練習、カトラやタイサンボクの剪定などで、振り返ってみると数え切れないほどの作業を体験させていただきました。高校生の時に思つていた実習と違ったものばかりで驚きました。

秋には一年生全員がコースごとに農家へ実習に行かせていただくカリキュラムがありました。実習日数は十五日と短かったですが、私は造園会社へ行き、いろいろな作業を見たり、体験させていただきました。まず、やはり庭師さんの作業速度は早く、私も庭師さんみたいに作業を早く正確にできるようにしたいと強く感じ、高校の時以上に造園に興味がわいてきました。

さらに、庭師さんが知らない道具をたくさん持つておられ、そこまでそろえなければ早く綺麗な作業はできないと思ひました。ですから将来造園の仕事に就いた場合は、まず道具をそろえたいと思ひました。

また、作業技術でもいろいろなことを学びました。例えば刈り込み作業での鋏の使い方や知らなかつた道具の使い方なども教えていただきました。

そして、短い期間でしたが貴重な数多くの仕事の仕方を学びました。それは、一日の計画を立ててから作業を始める事、後先の作業を考えて行動する事、道具を使つたら必ず元あつた場所に戻す



事、さらに作業のすべてを中途半端にしてはいけないことなどです。このように、とても良い経験ができたので将来に役立てていくようにしたいです。

このようなこともあり、私は人がいつ見ても良いと思えるような庭を作れるようになりたいと思います、我が家の庭の木も手入れできるようにになりました。

ところで、私の家は父が自営業で造園に近い林業の仕事をしているので、週に数回仕事の手伝いをしています。そして、その時も父や従業員の手の動きや作業の段取り、作業の仕方などを見て勉強できるようになったので、良い経験をさせていただいたと思っています。

また、山に行つて作業をする時も、休憩時間中に知らない木があれば、父や従業員に次々と聞きます。農業大学の授業で少しわかつていたつもりで

したが、多くが自分で思っているのと違っていたので、今のうちにしっかりと教えてもらい樹木の名前を憶えておれないようにしたいと思います。

私は、できれば将来父の会社に造園部門を作り本格的に造園をできたらいいと思います。このようなことから、造園会社で学んだ仕事の仕方や、家の仕事で教えてもらった事を活かして、残り一年と少ししかない時間を将来のためにしっかりと勉強していきたいと思っています。

農大に入学して学んだこと

香川県立農業大学校

畜産コース 一年

三好 朱音

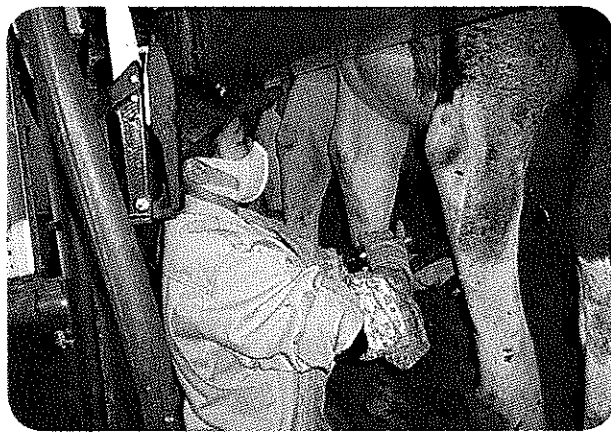


私が農業大学校に入学して、早や一年がたとうとしています。私が農業大学校に入学しよ

うとしたのは、高校の時から牛について興味があり、牛について学びたかったからです。しかし私が通っていた高校には、畜産で牛だけがいなく三年間ずっと何かしい日々を送りました。進路を決める際、真っ先に農業大学の進学を考えました。理由は、担任の先生から農業大学校では、牛について学べ実習もできると教えていただいたからです。

農業大学校に入学してから、牛以外にも豚、鶏など畜産全般のことも学べ、

とても楽しい新鮮な日々を送っています。他に農業の基礎的な農畜産概論、土壌、飼料作物、農業経営、農業簿記、英語、情報処理など様々なことを学んでいます。学校生活を通じて、農業の大変さや難しさがわかり農業が今どんな状況に置かれているか知ることができました。そして農業は奥が深いと痛感しました。



十月から十二月にかけて十五日間酪農家へ農家実習にいきました。そこでの作業は、搾乳から子牛の世話まで一通りさせていただきました。それにより牛の習性を間近に観察できました。農家さんからは、餌の配合や牛の病気の対処法を始め、酪農の難しさややりがいなどの様々なことについて教えていただき、有意義な経験ができました。

来年は夏季休暇の四週間をかけて家畜人工授精師の資格も習得するつもりです。また二年生からは酪農家での専攻実習が始まり、そこでの卒業論文の作成や就業活動など忙しくなりそうです。

農業大学校に入学して畜産に関して農場実習、農家実習、畜産試験場でのいろいろな経験をjして、野菜、花き、果樹、造園等の農業に夢をもった友達もできました。それに伴い私の農業に対する視野も広まってきました。

私はまだまだ未熟者でこれから不安もありますが、私の夢(畜産関係の仕事)に向かっていろいろなことに挑戦して毎日精進していきたいと思っています。

